

久米賞 小説部門 正賞 受賞作品

トロンプールイユ



郡山ザベリオ学園中学校

川崎 緑也

えっ？

紫色のバッグ、紫色のヒール、紫色のストッキング、紫色のワンピース、紫色の帽子、紫色のマスカラ、そして紫色のネイル。

高校生？…いや、違うな。

二十歳ぐらいのおねえさんかな。

でも、ママ（おそらくそうであろうと思われる付き添いの女性）の手をずっと握ってる。

大人がそんなことする？

時折、うめき声ともしゃっくりともつかない小さく短い声を発している。そのたびママの手は、おねえさんの手を握り返す。

「高橋さん。」

受付の静かな声がおねえさんと呼んだ。おねえさん親子は寄り添いながら診察室に入ってしまった。

息が詰まるような、母親と二人きりの時間が流れた。おねえさんとは違い、私の手が握っているのは母親の手ではなく、画面にひびの入ったスマホ。私はいとおしむように両手でその傷ついたスマホを握りしめていた。

診察室のドアが開くと、おねえさんがママにもたれかかりながら出てきた。眼の焦点は明らかに虚空の一点に収束し、足元は歩き方を忘れてしまったかのように右足と左足が交互に床に円を描いていた。ワンピースから伸びたその四肢はとうてい彼女の意志通りに動かすことなどではしないのではと思われるほどやせこけていた。

突然、静寂を破る音が待合室に響いた。

床に円を描く紫のコンパスを見つめていた私の眼はその瞬間、左斜め上の音の発生源を捉えた。

紫の爪で彩られたおねえさんの手が、ママの背中になく、けれども確かなダメージを残しているであろうことは容易に想像できるしなやかさをもって振り下ろされている。泣きながら、何度も、何度も。ママも泣いている。二人とも声を立てずに泣いている。泣きながら待合室のドアから消えていった。

「一ノ瀬さん。」

私を呼び出す受付のコールが響いた。

隣の薬局で薬を処方してもらい、母親の車に乗った。

「よかったわね。なんともなくて。お薬も出たし。飲み切れればきつとよくなるわよ。」

なんて能天気な母親なんだろう。

「なんともない」患者に薬が処方されるわけじゃない。第一、血液検査もレントゲンも撮らず、体重さえ聞かずに問診だけで処方される薬なんて怪しくって飲めたもんじゃないって、なぜ思わないのだろうか。

「でも、本当に安心したわ。これで受験には間に合いそうだものね。」

「安心」？

何が安心なのだろう。「安心」って、逆の言葉は何なのだろう。後部座席でググってみた。「安心 対義語」：検索、と。

出た！そっか、「不安」とか「心配」か。不安も心配も取り除かれた

から、受験に邁進しなさいってことね。

：私の母親は受験をしたことがないのだろうか。中三の頃の不安とか心配っていったら、真っ先に受験なんじゃないの？

「もう、スマホばかり見て。帰ったら勉強するのよ。病気じゃないんだから。」

「病気じゃない」？

夜も眠れなくて、朝も起きられない。食欲だつてないし、血色も悪い。学校だつていっぱい休んでるし、たまに行つたかと思えばめまいがする。下痢と便秘を繰り返してるし、生理だつてどっかへ行つちやつたみたいだし。定期的にやってくるのは変な頭痛と妙な落ち込みと意味のないハイテンション。いったい、私のどこが「病気じゃない」の。あの医者、ボンコツにもほどがある。どう少なく見積もつたつてこのくらいの症状は持つてるんだ。「起立性調節障害ですね」くらい言つてくれてもよさそうなものだ。処方した薬だつて、せいぜい睡眠導入剤と整腸剤くらいなものに違いない。とにかく、私はれつきとした「病気」なんだ。

もうすぐ十五回目の誕生日の私と、紫のおねえさん以外は、世の中のすべてが穏やかな夏の初めだつた。

「おう、一ノ瀬。生きてたか。相変わらず顔色悪いな、お前は。放課後、一緒に走ろうぜ。体力つくぜ。体力がなきゃ、世界征服をもくろむコスゲルゲの組織と戦うこともできないからな。オレ一人じゃ勝てる自信もねえしな。一ノ瀬も参戦してくれたなら心強いってめんだろ。」

最後の中体連は二回戦で終わったはずなのに、まだ部活してんの、夢野は。早めにかかった中二病が、まだ完治してないんだね。だいたい、数学の小菅先生は地球征服をもくろんでるわけではなく、夢野の偏差値向上を最大使命としているだけだし。困ったもんだね、中二病も。じゃ、夢野も「病気」ってことか。いやいや、中二病は

病気じゃない。ま、中二病罹患者でもいいやつはいいやつなんだよ、夢野は。自信を持ちな。きつと君一人でも地球征服は阻止できる。

「緑ちゃん、おはよう。今日は大丈夫なの。久しぶりだね。最近、休み続いたもんね。私も、来たり来れなかったりだけど、授業に出られてた分は、後でノート貸したげるね。」

「あ、凛ちゃん。ありがとう。今日はちよつと体調がいいんだ。」

凛ちゃんはいつだつていい子。いつもニコニコしてるし、必ず声をかけてくれる。何より、かゆい所に手が届く絶妙のフォローが心地いいを通り越して神の領域にまで届いている気さえしてしまう。だいたい、透き通るように白い肌はこの世の何よりも美しいとさえ思える。日焼け対策も完璧で、いつも長袖のブラウスを楚々と着こなしている。同じ中三なのに、落ち着きとか立ち居振る舞いとか、私なんかとは全然違う。中学校に入つて初めて出会った隣の小学校の子だけど、なんか、ずつと友だちだったみたいない感じでいつも気にかけてくれている。

そういえば、夢野んちとか凛ちゃんちのお母さんって、どんな人なんだろう。きつと、子どものことを一番に考えてくれる人なんだろうな。物事を落ち着いて考えてて。私の母親とは大ちがいなんだと思う、きつと。

教室に入ると、うるさく走り回る男子たちと、いくつかの小さなグループで固まつて小声で話している女子たちの光景が飛び込んできた。少しめんどくさい気もするが、日常といえば、ザ・日常のありふれた中学校の教室界限だ。

「三者面談の日程が決まつたので、メールで送っておきました。うちの方と必ず確認してくださいね。ねえ、夢野君。先生がお話をしているときはきちんと体をこちらへ向けなさい。」

また不毛なやり取りが始まつた。中二病の夢野がともに先生の話なんて聞くわけがないし、しまいにはキレてふてくされるのがオチだ。夢野はそのたびに職員室に呼び出されて、もしかしたら学校

で一番の職員室の常連さんかもしれない。英語担当の山口先生がこのクラスの担任になってから一年半近く。そろそろお互いのクセを理解し受け入れる度量を身につけてもよさそうなのだが、二人ともなかなかのお子ちゃまで、最近は少しため息が出てしまう。私もどちらかといえば山口先生は苦手だ。決して教え方が下手とか、怖いとか冷たいとかいうのではないんだけど、しいて言ええば「しつこい」。私の休みが続くと、必ず決まった時刻に家に電話がかかってくる。それも、始業前、つまり私の家では母親が出勤するために家を出なければならぬ時刻に一連の「儀式」が展開される。

緑さんは何かあったのか、熱はどうか、明日は来れそうか、今日の授業はここまで進むから自分で学習しておくようにとかをこまごま母親と話した挙句に、私に代わる流れとなる。母親も母親で気を利かせて、横になっているとかトイレとか言ええばいいのに、馬鹿正直に

「はい、今、代わります。ほら、緑、山口先生よ。」

とくる。悪い人でないのはわかるが、心底私を心配して電話をかけてきているように思えない。決まった台詞を一字一句たがわぬように丁寧に着えて滞りなく遂行される、まさに儀式だ。山口先生のこの、土足で他人の家に上がり込んでくる感じが苦手だという友だちは、私だけではないようだ。

三者面談が始まって三日目。私は、凜ちゃんのコマが終わるまでの恐ろしく長く感じる時間を母親と二人で図書室で過ごしていた。面談が終了したら、そのコマの生徒が次のコマの親子を呼びに来るシステムになっていた。

「ごめん、緑ちゃん。少し遅くしちゃったね。おばさん、次ですので、どうぞ教室にいらしてください。」

どうした？凜ちゃん。涙、出てない？

「凜ちゃん、どうしたの。なんかあった。」

「ううん、なんでもない。大丈夫、心配ないから。」

そういうと、凜ちゃんは小走りに図書室を出ていった。

面談が終わり、母親は、

「ああ、よかった。何も心配ないって。ねえ、緑。あとは欠席日数が増えないように気を付けてって、山口先生おっしゃってたわね。」と、運転席にすわり、まっすぐ前のフロントガラスに向かって一人で話していた。

「心配ない」¹¹「安心」？

デジャブのようだった。：ため息が出た。

私は、凜ちゃんに連絡を取ろうと思い、ケータイのロックを外した。そうして気づいた。凜ちゃんはケータイを持たされてなかった。

その日から私も体調を崩してしまい、結局登校できたのは、一週間後の火曜日だった。その日、凜ちゃんは学校に来なかった。教育相談の翌日からずっと学校には来ていないという。

「先生、凜ちゃん、どうしたんですか。風邪でもひいたんですか。」

「ああ、緑さん。私もね、毎日電話してるんだけど、凜さんのお母様は、熱もないし大丈夫だって。凜さんはいつも電話の時寝ているっていうんで、まだお話しできてないんだけど。」

やっぱり。凜ちゃんのお母さんは私の母親とは違う。ちゃんと居留守を使つて凜ちゃんを守ってくれている。さすがだ。でも、よかった。たいしたことなさそうで。安心した。

えっ？

「安心」？

「たいしたことない」？

しまった：

私も母親と同じになるところだった。たいしたことない状態の間は一週間以上も学校を休んだりしない。何かあったんだ。

「先生、凜ちゃんのおうち教えてください。」

「緑さん、心配な気持ちはわかるけど、個人情報だから、それはでき

ないのよ。」

それはそうだ。教師が友だちの家など簡単に教えるようであれば、今どき大問題だ。納得して、次の手を考えながら歩いていると、うしろから、ドップラー効果でも巻き起こしそうな勢いで大きな声が迫ってきた。

「よかった、一ノ瀬。お前、登校してたのか。あんな、実はな、はなぞね華実がな。」

「凜ちゃんが？」

「華実がずっと休んでてな。んで、うちの母ちゃんが職場でうわさを聞いてきてな。」

夢野のお母さんの職場に、凜ちゃんのお母さんの元同僚がいて、その人からの話らしかった。

「華実ってさ、小学校はおれらとちがつてたじゃん。でも中学の学区が同じだから、今の中学校で一緒になったってわけでしょ。だから、おれたち、実は本当に浅くしか華実のことを知らないわけだ。」

「そう。凜ちゃんは東小。私たちは西小。」

「で、小三の時、東小に転校してきたんだけど、前とは名字が違ってたんだった。」

「えっ。」

「そう。なんでも、お父さんとお母さんが離婚して、華実はお母さんと一緒に今のところに引っ越してきたんだってさ。」

「まあ、あるあるっちゃあ、あるあるよね。」

「ここまではな。」

「華実のおふくろ、昼も夜も働かなくちゃいけない状況になって、子どもときから華実、おふくろが用意していったご飯をあっためて一人で夕飯食ってたんだって。」

「じゃあ、いつも一人でずっとお留守番してたってこと。小学校三年生が。」

「うん。ほんで、高学年の頃には学校、休みがちになってな。たまに

学校に行っても、ほら二組のちょっとしたことで大騒ぎしてすぐはやし立てる東小から来た杉野。あいつらにくせえとかきたねえとか言われていじめられてたみたいなんよ。」

「ああ、杉野ね。らしいわ。」

「んで、華実、なかなか学校に足が向かなくなっちゃったみたいでさ。」

「わかる。凜ちゃん、頑張ってたんだね。つらかったろうにね。でも、中学になったら、凜ちゃん元気で登校してたじゃない。休みがちな私にもとてもやさしくしてくれてたし、ノートなんかも見せてくれてたし。頼りになる存在だよ。」

「オレもそう思ってたよ。でも、華実のお母さん、去年あたりから、彼氏ができたみたいで、ちよくちよく家に来ては、華実が暗いとか言って、邪険にしてるみたいなんだ。」

そりゃ、凜ちゃんのお母さんだって大人なんだし、お付き合ひしてる人の一人や二人いたって、私はいいと思う。でも、その人が、凜ちゃんに対してとやかく言うのは間違ってる。ましてや、表情が暗いとか、笑わないとかっていうのは、凜ちゃんの問題ではなく、それを受け止める側の人間の主観だ。「それってあなたの感想ですよね。」って感じた。よけいなお世話だ。いったい何者なんだ。なんの権利があつて凜ちゃんの心をかき乱すんだ。

しかし、凜ちゃんに対してなし得るわずかな方策をも持ちあわせていなかった私は、彼女に対して無関心で醜悪な周囲と同じ顔で彼女の目には映っていたに違いなく、自分自身を非難し、責めることしかできなかった。

結局、凜ちゃんの顔を見ないまま夏休みを迎えることになってしまった。私も休んだり登校してみたりといった安定しない日々を過ごしていたので、凜ちゃんがいつ登校していたかはわからなかったが、夢野の話では、あれからずっと学校には来ていなかったという

ことだった。

夏休みも半分が過ぎた八月の狂おしい暑さの昼下がり。ミンミンゼミの声と同じくらいのけたたましさで、夢野の声がうちの玄関先で鳴り響いた。

「一ノ瀬、一ノ瀬え。華実が、華実が学校に来てるぞ。」

「えっ。凜ちゃんか。」

夏休みというのに、受験勉強もせずに暇を持て余した夢野は、もうとつくに引退したはずの部活へ顔を出し、煙たがられていることにも気づかずに、先輩面を十二分に発揮していたらしい。水分補給の休憩の時、学校の廊下を山口先生の後について歩く凜ちゃんを見かけて、この炎天下、自転車を漕いで急いで知らせに来てくれたのだ。

「あつ、緑ちゃん。」

昇降口の下足箱の前で待っていた私を先に見つけたのは、大きめのバッグを持って少しやせ透明感を増した凜ちゃんだった。

「凜ちゃん。どうしてたの。体の具合でも悪かったの。心配してたんだよ。だって、三者面談の時、凜ちゃん、泣いてたよね。」

「緑ちゃん。」

そう一言だけ発すると、凜ちゃんは、私の肩に顔をうずめて泣きじゃくった。生暖かい涙がTシャツにしみ込んだ。夢野の知らせで、部屋着のままで飛び出して走ってきた私は、彼女の涙をぬぐってあげるハンカチさえ持っていなかった。

「夢野、ぼうつとしてないで、凜ちゃんのバッグ、持っただけ。」

「あ、えっ。う、うん。」

「凜ちゃん、いったん、うちへ行こ。」

Tシャツに短パンの私は、相変わらず長袖の薄手のブラウスにスカートとかわいらしいサンダルをはいた凜ちゃんの肩を抱きながら家へ向かって歩いた。傍らを少し拳動不審気味に、凜ちゃんのバッグを乗せた自転車を押して歩く夢野の姿も併せて、客観的に見ると

実に奇妙な三人の姿がそこにあった。

「さあ、入って。」

「でも、急におじゃまして……」

「緑い、どこ行つてたの。まったく。お昼ご飯も半端にして出てっちゃって。お母さん、お夕飯の買い出しに行かなくちゃいけないのに。あれ、お醤油ってあったつけ。ま、いいか、二、三日は間に合うか。重いものね、お醤油は。」

だれも聞いていないにもかかわらず、自分勝手に質問を發し、自分一人でどんどん話を進め、正解を得てしまふ能天気な母親が私たちを出迎えた。

「あら、華実さん、夢野君。暑いわね。変わりない？」

どう見たって「変わり」はある。色白の泣きじゃくる少女と、大きなバッグを抱えた中二病男子、そして部屋着のまま外から帰ってきた自分の娘。どう見たって尋常じゃない。

「いいから、あっち、行つて。」

三人で私の部屋に入ると、しばらく沈黙の時間が流れた。正直、私もどう話を切り出してよいのやらわからなかった。凜ちゃんの様子は、それほど突き詰めた様子だった。結局、沈黙を破ったのは、やはり能天気で無遠慮な私の母親だった。

「暑いわね、今日は、特に。ね、ほら、麦茶でも飲んで。そう、熱中症も怖いからね。おばさん、気を利かせて、スイカ、塩振っておいたからさ。華実さんは、真っ白いブラウス、汚さないようにね。スイカの汁がつくと……」

「いいから！向こう行つて。じゃま！」

自分でも驚くくらいにつっけんどんな言い方だった。夢野が気をつかって、

「一ノ瀬、おかあさん、せっかく持ってきて下さったんだから。」

「いいのよ、夢野君、いつもこうなんだから。緑は今、絶賛反抗期発動中なのよ。」

かあつと顔が赤くなるのがわかった。友だちの前で、それも、私より大人びて反抗期なんて完璧に乗り越えてる凜ちゃんとか、私よりもずっと幼い中二病の夢野とかの前で正面切って「反抗期」と言われたことがたまたまなく恥ずかしかった。それまで自分が反抗期だなんて指摘されたこともなかったから、自覚のなかったところで間接的に指摘され、反論もしたいがその根拠も持ち合わせていないのがほてりを増幅させている。落ち着け、私。

「うるさいってばー!」

「じゃ、二人とも、ごゆっくりね。」

場違いの明るさと微笑みをたたえて、私の母親は部屋のドアを閉めた。

凜ちゃんの目にまた涙が光った。さつきよりも大粒の涙がこぼれた。いや、流れたといったほうが適切だった。そして、小さな子どもが転んですりむいた時と同じような大きな声で、ベッドの端に腰掛ける私のひざの上に顔を乗せて泣きじゃくった。私はどうすることもできなかった。子どもだった。こんなときに友だちにかけるいくつかの言葉を持ち合わせているのが大人なんだと思った。そして、私はその一つも持ち合わせてはいなかった。

『…子どもだ。』

隣で、夢野もそう思っていたに違いない。

三者面談の日、凜ちゃんは、山口先生から進学希望の高校を尋ねられた。凜ちゃんが答える前に、凜ちゃんのお母さんが、

「先生。凜は、進学はしないんです。なるべく早く就職したいって言ってるんです。」

と答えたという。

それは、凜ちゃんにとって寝耳に水だった。進学のことをお母さんと話したことなど、それまで一度もなかったというし、普通に高校に進学するものだと思っていたという。

「小学校の高学年のころから、不登校になっちゃって。そんな子、進

学を希望しても無理なんですよ、進学なんて。」

「いえ、お母さま。それは小学生の時で、中学校に入ってから、それほど多くはありませんし。」

「いいえ。無理に決まっています。さぼり癖のついた子なんて、どこの高校だって取ってくれるはずがありませんもの。」

「お母さん…」

三者面談から帰って、凜ちゃんは、もう一度お母さんと話をしたそう。進学して、将来は幼稚園の先生をしてみたいと。

私は、凜ちゃんにびつたりの職業だと思った。かわいらしいエプロン姿で、ぐずっている子どもをやさしく抱いている凜ちゃんの姿が目につくんだ。

その話の場には、お母さんのお付き合ひしている男の人もいたそう。その人は定職に就いてはいないようで、凜ちゃんは、お母さんがその人に茶封筒を渡している姿を何度か見かけたことがあったという。その男の人は、

「いいか、早く稼いで親に金を入れるのが一番の親孝行なんだ。お前が小さい時から女手一つで育てた母親に迷惑をかけるのはどうなんだろうな。もう、中学校も終わって一人前なんだから、そろそろ親孝行しなくちゃいけないんじゃないのか。俺の知り合いに四国で旅館をやっているやつがいて、そいつが住み込みで働かせてやるって言ってるから、そこに行くといい。」

と凜ちゃんに言ったそう。

「それで、凜ちゃんのお母さんは？」

「ううん。何とも言ってはくれなかった。」

「それで、凜ちゃんは？」

「私は、私は、高校に行きたい。でも、お母さんは、ずっと私のために昼も夜も働いて、それなのに私は、学校を休むことが多くて。あの人の言う通りかもしれない。それに幼稚園の先生になるためには、高校を出た後も、大学や専門学校に通わなきゃいけないし。早く就

職してお母さんにお金を入れるのが一番じゃないかって。これ以上迷惑はかけられないもの。」

理不尽だと思った。凜ちゃんのお母さんの付き合ってる男の人がお金を欲しがってるに違いない。凜ちゃんにそのお金を稼がせようとしているんだ。

「私、今日、退院して、まっすぐ学校に行ったんだ。お母さんに言われて。暑さで体調を崩したっていうことにおきなさいって言われて。病院まで迎えに来てもらって学校の前で降ろされた。今夜は用事があるから、一人で家に帰ってなさいって。」

「退院って、入院してたの？」

「うん。」

「なんで？いつから？」

「うん。三週間くらい前かな。緑ちゃん、知ってるかな。オーバードーズと[・]かって。」

聞いたことはある。「クスリ」だよ。トー横とか、都会の子たちの、それも高校生とか、無職少年とかの話だと思ってた。こんな田舎の中学生の、それも、凜ちゃんみたいなおとなしくってまじめな子がと考えると、少しギャップが大きすぎて、丸ごと理解するには時間がかかりそうだった。反応が遅れた。

「何も知らねえんだな、一ノ瀬は。」

夢野が割って入った。

「普通の市販の薬とかを大量に飲むと、変になっちゃったり死んじゃったりするやばいやつだよな。」

「えっ、じゃあ、自殺、しようとしたの。」

「ううん。別に積極的に死にたいって思ったわけじゃない。前から『死んじやったら、何も考えなくていいから、楽かも』とかっては思うことはあったけど。」

言葉が出てこなかった。何か言っただけなくちゃと思うんだけど、口の中で言葉を組み立てることができなくなっていた。自分の

身近な友だちで、そんなに悩んでる子がいたなんて。私にできたことはなかったのかって。

「あつ、でも大丈夫だよ。本気で死のうとかは思っていないから。ただ、楽なんだ。薬飲んだりとかすると。一瞬でも楽になる。」

「凜ちゃん。」

「ありがとう。なんか、いっぱい泣いてすっきりした。緑ちゃんと夢野君に聞いてもらって、なんか軽くなった。」

緑ちゃんはそう言うと、一人で家に戻っていった。だれも待つてはいない家に。そして、一人きりで夕飯を食べるのだろう。

「華実さん、夢野君。おばさんのから揚げ食べてって。って、あれ。華実さんは？」

何も知らない母親が素っ頓狂な声で部屋に入ってきた。凜ちゃんは帰っちゃたよ。

「だめだよ。」と言わなければならなかったのかもしれない。そんな危険なことはすぐにでも「やめなよ。」と言ってあげなければならなかったかもしれない。でも、私は、止めることは緑ちゃんを否定することにつながると思ったのだ。理由はわからないが、否定することになってしまうと思ってしまったのだ。

二学期が始まり、凜ちゃんはいつもの凜ちゃんに戻ってニコニコ笑みを浮かべて私を迎えてくれた。

「おはよう、緑ちゃん。」

「あつ、凜ちゃん。お、おはよう。」

「あのさ、緑ちゃん。私、緑ちゃんに叱られたり、嫌われたりすると思ってたんだ。」

「どうして？」

「だって、あんなばかなことやって、入院までして。友だちに心配かけて。でも、ありがとう。」

かまわないと私は言った。凜ちゃんはかすかにほほ笑んだ。(よう

に思いたかった。)

いつも通りの時間が過ぎ、私たちは、学校を休んだり、登校した
りをお互いに繰り返していた。何ら変わりばえのしない日常だった。

卒業式の朝、凜ちゃんは登校してなかった。いつもと云えばいつ
もの風景だった。

でも、凜ちゃん。中学校最後の日だよ。一緒に写真も撮りたかつ
たのに。さびしいよ。

最後の朝の会の時に、山口先生が話した。

「みなさんにお知らせがあります。華実さんが昨日引越しました。
本当は卒業式には出席するわけだったのですが…。急に決まったそ
うです。みんなには内緒にということで、今日のお知らせになってし
まいました。」

私は、なんとかかんとか高校に合格した。夢野も大好きな部活が
できる高校に無事進学した。母親は、

「緑なら大丈夫って、私はずっと思ってた。」
と、あいかわらずのんきに話していた。

高校の入学式の翌日、山口先生から母親のケータイに電話が入つ
た。いつも通り、少し話をした後、私に渡された。お祝いでも言わ
れるのかとも思ってた電話を代わった。

「一ノ瀬さん。あのね、華実さんがね…」

山口先生の声が遠のいていった。朽ち果てた遺跡のように立ちつ
くした。

透き通るような肌の少女の長そでのブラウスには理由があったの
だ。単なる日焼け対策などではなかった。彼女が負った傷を覆い、
彼女自身が彼女を傷つけることから守る装甲でもあったのだ。

…うかつだった。気づいてやれなかった。凜ちゃんの明るさとや
さしさがただ心地よかった。大変なのは私だけといつもいつも思っ

てた。私は結局、自分だけだった。もつともつと気を張るべきだった。
凜ちゃんは、あの時、確かに「オーバードーズとか」って言ってい
た。「とか」に気づくべきだった。しかし、気づいたところで、私は
凜ちゃんを止めていただろうか。…わからない。凜ちゃんが私だつ
たら、決して止めたりはしなかったと思う。だって、一瞬でもそれ
で私が楽になることを彼女は知っていたから。

私と凜ちゃんは何が違うのだろう。妙に冷静になってくる頭の中
で、私は凜ちゃんとの差異を検証し始めた。何でもいい、作業に没
頭すれば、現実から離れることができる。

突然、

「から揚げ、食べさせたかったな。」

と、母親がつぶやいた。こんな時にまだ。無遠慮に必死の作業を
遮断する、場を考えないのんきさには怒りさえこみ上げそうになつ
た。ふと、その時気づいた。

そうか。母親なんだ。凜ちゃんと私では、母親の在り方が違うんだ。
凜ちゃんだけを思ってた一生懸命すぎるほど頑張つて、無意識に凜ち
ゃんを追い詰めてしまった凜ちゃんのお母さんと、どこまでも能天気
な私の母親。凜ちゃんだって、紫コンパスのおねえさんだって、う
ちの母親みたいな人の娘だったら、違ってたのかもしれない。そう
だったらよかったのにね。そうでしょ、お母さん。

「えっ、何か言った？さて、今夜は凜ちゃんと一緒にから揚げだ。」

エプロンで目をおさえながらも、いつもの能天気な声で言った。
でも、不思議と私の心はイラつかなかった。

『しょうがないなあ。凜ちゃん、お母さんのから揚げ、一緒に食べてつ
てあげてね。』

(指導教諭／柳 沼 とも子)

《作品の意図》

「トロンプ・ルイユ」とは、錯視を利用した絵画のことである。日本語では「だまし絵」などと呼ばれる。老婦人の顔と貴婦人の顔が一つの絵画に見えるものが有名である。二つともが見える人と、どうしても片方しか見えない人とがあり、見えないほうが見えるようになると少し驚いたりもする。

自分の目に映るものがすべての人に同じように見えているとは限らない。たった一つの出来事や対象でも、複数の意味を持つのが通常である。そしてその意味は対象そのものが有しているのではなく、対象を認識する私たち自身にゆだねられている。自分自身を、そして周囲を幸福にするのも不幸にするのもこのとらえ方の幅の広さであると考ええる。

隠された意図を、できるだけ柔軟に、できるだけ多様にとらえていくことができる大人になっていきたいと私は願う。

《作品の寸評》

主人公の緑は母親や先生といった周囲の大人に対して、批判的で皮肉な態度で観ているが、自分はそれが反抗期であるとは気づかず、友人の夢野を自分よりも幼い「中二病」だと思っている。しかし、凜という友達の境遇を知っていく過程で、彼女の苦悩や葛藤を知り、自分と比較しながら緑自身の立場も客観的に見られるようになる。

この作品においては友達の凜の存在が大きい。主人公の緑よりも大人びた存在として描かれるが、実は母親からネグレクトに近い扱いを受け、将来も自分では選べない境遇が描かれる。自分を守る手段としてなのかその境遇から抜け出したかったからなのか、凜には大きな秘密があった。緑は凜のことを知るたびに考えさせられる。

この小説の描き方は、作者が登場人物に同化するというより、小説の外からしかも高い視座から、登場人物に巧みに語らせている印象をうける。そこに作者の仕掛けの巧妙さがある。

『トロンプ・ルイユ』（錯覚を利用した絵画・だまし絵）という題名も、表面的な見方ではなく、多面的に客観的に物事を見極めたいという作者の意図が伺える。

（審査員／三輪 晶子）